

## おおいしだものがたり

~資料館資料編~

只今資料館では、日本遺産「山寺と紅花」関連企画展大石田に遺る近代日本画展を 開催中です。この中から今回は柴田是真作『月宮殿』をご紹介します。

作品の前に、まずは「日本画」とは何か、ということを考えてみます。より広義に 日本の絵画と考えれば、平安時代の絵巻物や鎌倉時代の仏画、室町の水墨画、桃山の 障壁画や江戸の浮世絵なども日本画に含まれます。ただし、これらの作者は絵仏師や 画僧、あるいは絵師であり、「日本画家」と呼ぶことはありません。というのも「日 本画」という概念は近代以降にできたものだからなのです。

明治初期に、ファイン・アート(英)などの翻訳語として出来た「美術」に合わせて、 「西洋画」との対比で作られたのが「日本画」という言葉です。この「日本画」の中 には、フェノロサや岡倉天心の影響と指導で展開していった東京美術学校一日本美術 院系統のものと、江戸時代以来の町絵師的立場から新しい時代に対応していったもの の、二つの系統の日本画がありました。このうち後者の系統に属するのが柴田是真 (文化四・1807-明治二十四・1891)です。

柴田是真は、円山派の鈴木南嶺の手ほどきを受け、その後四条派の諸氏に学びまし た。是真が学んだ円山四条派のエッセンスは、彼のみならず、近代の日本画にとって も重要なはたらきをしています。応挙・呉春の円山四条派では、「写生」という考え のもと、対象を客観的実証的に捉えることを重視していました。西洋画の技法とはや や異なるものの、この写生の下地があったため、日本画は洋画の写実表現をゆるやか に受け入れることができたのです。円山四条派から川端玉章や竹内栖鳳といった、日 本の伝統的画風に西洋画の空間表現を巧みに取り入れた日本画家が排出されているこ とからもそれがわかります。是真は玉章・栖鳳らよりも上の世代にあたり、画技の他 にも、頼山陽や香川景樹らから漢学や国学、歌学を学びました。そこで培った教養は 近代的感覚に独特のエスプリを加え、より洗練された作風を形作っています。

さて、『月宮殿』は掛軸装ですが、表面が全て本紙(画面)になっています。目線の

高さに描かれる満月は、着彩ではなく周りの闇を塗り残すことで表わされているのも面白いところです。月 の中に浮かび上がる、インドや中国の伝説、または竹取物語にも登場する月の宮殿は、月のクレーターの模 様のようでもあり、空想上のものでありながらいたって自然にそこにあります。画面下方には桔梗や萩でし ょうか、色彩はなく墨の陰影のみで秋草が添えられています。宵闇の中、薄墨の濃淡やさりげなく刷かれた 金粉で雲間から差し込む月光を表現し、幻想的な風情を演出します。おぼろげな中にも穏やかな変化があり、 すっきりとした画面が落ち着いた秋の夜長の雰囲気と調和していて、その場の空気さえも描いたような現実 感があります。ふと月の宮殿に想いを馳せてしまう魅力的な作品を是非ご覧ください。

> 日本遺産「山寺と紅花」関連企画展 大石田に遺る近代日本画展は11月15日(日)まで

共通する

も食

私は麺類

o) 歳を迎

※この人数は外国人も含めたものです

## 悪がき帳

2.335戸 (+1) 総人口 6,792人 (-6)

3,335人 (-1)

3,457人 (-5)

(8月中の異動)

出生 1人 転入 11人 死亡 4人 転出 14人

広報おおいしだ 2.9 | 16